

吹雪の北海道旅行、そして…

法学部 江部理恵

卒

業旅行で訪れた北海道。最終日まさかの大吹雪、飛行機は遅れに遅れたあげく、欠航となった。翌日の航空券は確保したが宿泊先がみつからない。近郊ホテルすべてに断られ、中大生協の代理店は日曜で電話が通じず、港内の代理店には「何もできません」とあしらわれた。

仕方なくファミリールレストランかネット・カフェで1晩明かそうと



蓮池夫妻と一緒に=03年3月14日、駿河台記念館

思った私たちは、空いた代理店に近い店舗を聞きにいった。事情を説明すると、今度は店長らしき人が登場。契約ホテルに空きが1つあることを教えてくれた。ツイン素泊まりで1万円。欠航時、料金を上げるホテルもあるなか格安だ。ただ私たちは女3人組。どうにか2部屋確保したい。「ではこっそり1部屋3人で」と店長。それはもう、それが一番助かるけれど。万が一フロントで高額請求された場合には、と代理店の電話番号まで教えてくださった。感謝のあまり泣きそうになった。でも疲れて涙も出なかった。

そうして私たちは無事宿泊（規則違反だが）、翌日は吹雪も止み羽田へ到着、充実した旅行を終えたわけだが、この代理店のおじさんのことが今でも忘れられない。接客の心得とか仕事人のかっこ良さとかをいうつもりはない。ただ、何度も思い出し、心の中をかみしめ

る。これまでもさまざまな場面で私は励まされてきたように思う。そういう大人に私もなりたい。

私の心に残る思い出には、感動がある。そしてそこには必ず尊敬できる人との出会いがあった。

そういった意味で、とくに学生記者活動というのは、まさに出会いの連続。濃密な思い出を私に残してく

草サッカー、ミスターレッズ、ボーのこと

総合政策学部 小野光雄

陽光が差しこむグラウンドには砂ぼこりが舞っていた。風が

初試合を歓迎しているようだった。手足はかじかんで思うように動かない。吐息は白かった。

大学3年のときから不定期で、草サッカーをやっている。バイトの友人は清水エスパルスの熱心なサポーターだった。ひよんなことから、スタジアムに観戦に行った。すっかりハマってしまった。清水エスパルス

のホームである日本平スタジアムまで観戦に行つたことも1度や2度ではない。しかもヒッチハイ

れた。一昨年の蓮池薫夫妻の取材は朝10時から夜8時までの長丁場。苦労も感動もひとしおで一番心に残っている。その日はちょうど3月14日、ホワイトデー。取材の間、編集長からクッキーをもらった。アメとムチだったかもしれない。でも彼からの贈り物より、よく覚えている。思い出とはきつとそんなものだ。

クで。帰りに観光用のバスをヒッチハイクし、友人と3人で貸切つた！なんて逸話もある。

見ているだけでは物足りない、草サッカーを始めた。チームの名前は白松屋。バイト先の府中白木屋のメンバーと定期的に練習試合をしていた八王子松屋のメンバーと一緒に手を結んだ。ユニフォームは清水エスパルスと同じオレンジ色。「オランダカラー」と信じてやまないメンバーもいる。

中高6年間、バスケットばかりやっていた私だが、大学に入ってから不思議とサッカーには縁があつ

記者として

た。2002年日韓W杯のときは運良くチケットを手に入れ、静岡スタジアムで行われた、ブラジル対イングランドを見る事ができた。大学3年のときには学生記者として、ミスターレッズこと、福田正博さんにインタビュする機会にも恵まれた。2度の大きなケガと戦いながら、生涯レッズを貫いた姿に感銘を受けた。話をするときはこっぴど物が物怖じするくらいまっすぐ目を見つめて話すのが印象的だった。

白松屋の初試合の結果はあえてここでは書かない。これからの伸びしろはある、とだけ記しておく。メンバーの中に一人だけカンボジアからの留学生がいる。名前はポー。農工大で練習していたときに「私もやりたい」と声をかけてきてチームに入ることが決まった。片言の日本語と



英語まぜての会話で他のチームのメンバーとはうまく言葉が伝わらない。それでもポーは言う。「サッカーは好き。みんな友達だ」ポーにユニフォームをプレゼント

肩こりと学生記者と堀越えと

文学部 酒井まりえ

肩こり。それが、私の大学生活を構成する要素の一つだ。原因は、単純に荷物の重さ。4年前、「教科書と、語学で必要な辞書を購入して下さい」と指示を受け、手元にとっ

ちやりやつて来たテキストたち……。ちなみに国文学専攻なので、読むべき本も多かった。そして私は、重いテキストと辞書と共に学校に通ってきたのである。

今考えれば、電子辞書を買うとか、必要などころだけをコピーするとか、荷物を軽くする方法は沢山あったと思うのだが、当時の純朴（要領が悪くともいえる）な私には、全く思いつかなかった。しかも、居合道部に入っていたので、荷物にはさらに刀と胴着が仲間入りした。こうなるともう肩は

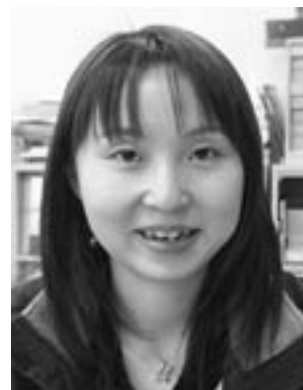
'05年春- 学生記者

トすることにした。彼がチームにもっと溶けこむように、サッカーを通して楽しんでもらえるように、と願いをこめて。

パンパンだった。

そんな私が「学生記者」を始めたのは何故だったろう。故郷の両親に私の活躍を見せたいとか、『HAKUMONちゅうおう』に笑いの新風を吹きこみたいとか思っていたが、「紙とペンがあればできるから、肩はこらないわね!」というのも理由の一つだったかもしれない。事実、荷物を持たない取材中は、肩が軽くて助かった。

それ故だろうか、今年度の白門祭取材でちよつとしたお転婆ぶりを発揮してしまったのは、肩だけでなく、心まで軽くなっていたのかもしれない（04年冬季号「学生記者サカイの△白門祭△斬り! 残念!」）。その時、取材したい人物がいたが、



その前に1mくらいの堀があった。何を思ったか私は、大勢の人の視線の中、ためらいもなくその堀を乗り越えてその人物に突撃した。回り道をするなど全く思いつかなかつた。後で「後輩記者に、取材にける情熱を見せたね」との評価を頂いたが、実際に後輩たちは私の背中を見て一体何を感じたのか、非常に気になる場所である……。

そんな私もついに卒業。肩こりからも卒業!と思っただが、私は春からシステムエンジニアの職に就く。パソコンに向かうと、やはり肩がこるそう。しかも先日研修では、たくさんのテキストと、パソコン用語辞典までもらってしまった。微妙に4年前とデジャヴしてる……と思いつつも、強く生きていこうと思う次第である。